

## 新出梵本『俱舍論安慧疏』（界品）試訳

小谷信千代（研究代表者）

秋本 勝 福田 琢 本庄良文 松田和信 箕浦暁雄

本試訳は近年ポタラ宮より発見された安慧の梵本『俱舍論疏』（Sthiramati, *Abhidharmakośaṭīkā Tattvārthā*: TA）の校訂本を完成するための補助作業として研究代表者である小谷が作成したものに、研究会において参加者より出された意見を参考にし、手を加えて成ったものである。会の目的はもとより梵本の校訂にあり、和訳をすることにはない。それゆえ拙訳は小谷の個人的な試みであり、文責はひとえに筆者にある。校訂作業はまだ始まったばかりで、ここに訳出した箇所のみに限っても解説できない語が幾つかあり、締切りに追われたためもあって、意味の通じ難い訳のままに提出せざるを得なかったことを研究分担者の方々にお詫びする。なお安慧の『俱舍論疏』のチベット訳を用いた研究としては松涛泰雄氏に多くの論文があるが、界品の冒頭部に関しては同氏の和訳がある（「*Tattvārthā*(VII)―冒頭部の解釈をめぐる―」『梵語佛教文献の研究』山喜房、1995、pp. 171-198）。

### アビダルマが説かれる理由、およびそれを説く人

(TA, 8b4; Pek, 25b5)

なぜアビダルマを説くのか等とは、どういう目的があるかというのである。極めて小さな目的をもつ論もあり無意味な目的をもつ〔論もある〕から、それゆえ目的を尋ねるのである。誰が最初にこ〔のアビダルマ〕を説いたのか〔とは、誰が〕その初めに〔アビダルマを〕説いたのか〔を尋ねるのである。すなわち〕、目的に基づく活動であっても、すべてが実りのあるものではない。また信頼できない人の説いた、昇天等を目的とする、断食による餓死や投火自殺など〔の活動〕も〔実りのあるものでは〕ない。ゆえに教示者を追求するのである。

軌範師衆賢は言う。「法が帰依処であり、人が〔帰依処では〕ない」と〔経に〕説かれているから、「誰が最初にこ〔のアビダルマ〕を説かれたか」というそのことは追求すべきではない、と。まさしくかれ（衆賢）は『順正理論』において世親に〕反駁を述べている。しかし〔アビダルマをカーティヤーヤニープトラ等の〕人を権威たるべきものとする人々を想定してそのように〔経に〕説かれたのであるという、そういう〔衆賢の主張〕は経の意味を知らないことによる。なぜなら、そこ（経）には仏によって説かれた法のみが帰依処であることが説かれている。〔しかし〕何であれ、仏によって説かれたものであることが決定されていることに矛盾しないものは、かれ（仏）とは別の者によって説かれたものであっても、〔帰依処として〕受持すべきであり、矛盾するものは〔受持すべきで〕ないということ、それがこの経の意味である。そして「大徳よ、諸法は、世尊を根本とし、世尊を眼とし、世尊を帰依処とする」と説かれている。それゆえそれ（誰が最初にアビダルマを説いたか）は追求すべきである。これは〔経と〕相違しているから追求すべきなのである。このアビダルマは軌範師カーティヤーヤニープトラ等によって造られたと聞いて追求がなされるのである。また、人を権威たるべきものとする人々を想定しても〔誰が最初にこ〔のアビダルマ〕を説かれたか〕と世親が〕言ったことは間違っていない。世尊によって権威として承認されていない、まさにそのものを権威として認めるというそのことが正しくない〔からである〕。

〔アビダルマ・コーシャを〕述べようとするのであるかとは述べようと努力するのかという意味である。凡そ法の〔正しい〕簡擇〔すなわち慧〕なくしてはとは、この場合、法の簡擇以外に煩惱の鎮まる方便はない。それでどうなのか。法の簡擇のみが煩惱の鎮まる方便であり、他〔の方便〕はないというのが語の意味である。それゆえ、世尊によって「私は、一法といえども遍知せず断じていなければ、正しく苦の尽きた者とは言わない」と説かれた〔それと〕同種類の解釈が〔世間でも〕見られる。たとえば、文法学なくしては容易な方法で言葉を理解することはできないと〔言えば、それは〕、言葉を理解するには文法学以外の容易な方法は存在しないというそのことが言われたことになる。

もし煩惱を断ずることがなければどうなるのか。それゆえ、そして諸煩惱によって世間〔の有情〕は等と言う。底に至り難く渡り難いから輪廻は大海の如きものである。また輪廻と呼ばれる三界あるいは五趣において、有情には煩惱

を因とする生涯が繰り返して出現する。ゆえに諸煩惱によって世間〔の有情〕は〔輪廻の大海に〕漂うと述べる。それゆえとは、諸煩惱によって世間〔の有情〕は輪廻の大海に漂うから、である。そういう理由でとは、その法の簡擇のために、そのために、という意味である。

師によってとは、仏陀・世尊によって、である。説かれたとは、語られた、である。舍利弗を初めとする弟子たちといえども、まだ説示されていない法相を簡擇することはできないから、師である仏陀が、論を造るに相応しいから、このアビダルマは説かれたのである。それでは法の簡擇以外に煩惱の鎮まる方便はないということとはどのように理解されるか。法の簡擇は愚癡の対治であり、また、愚癡なる者にのみ煩惱と随煩惱の生起はあり得、愚癡ならざる者には〔あり得〕ないからである。それゆえ法の簡擇以外には煩惱の鎮まる方便はない。それが「なぜアビダルマを説くのか」というそ〔の問い〕に対する答えである。「法の簡擇〔を得しめん〕がために」という。残りは法の簡擇の目的である。「誰が最初にこ〔のアビダルマ〕を説かれたか」というそ〔の問い〕に対する答えが「師、仏陀、によって」という〔語〕である。もし〔そうなら〕、アビダルマの作者が、どうして『発智〔論〕』<sup>2</sup>にとっては聖カーティヤーヤニープトラであり、『識身足〔論〕』<sup>2</sup>にとっては長老デーヴァシャルマンであり、『品類足〔論〕』<sup>3</sup>にとっては長老ヴァスミトラであり、他〔の論書〕にも他の〔作者〕がある〔と伝えられているの〕か。どうしてアビダルマは世尊によって説かれたのかという疑念を除くために、しかし〔世尊は〕そ〔のアビダルマ〕を散説された〔に過ぎず〕と言う。しかし世尊は所化の気質から〔為された〕問いを考慮してそのアビダルマを散説された。六神通を具えた長老カーティヤーヤニープトラ等が、願智によって、過去の師（世尊）の所説中に、法主（世尊）の意図と法性とを観じ、集めて品とし、「雑品」等の蘊に区分して編輯したのである。あたかも大徳ダルマトラータによってウダーナが編纂された如くである。ウダーナの偈はあちこちの僅かな場所に説かれた〔ものであった〕。アビダルマも同様であるから、アビダルマは仏によって説かれたものに外ならない。

この場合の伝説するという語は、アビダルマを仏説とすることに対する経主（世親）の不機嫌を示すことを意味する。ではかれはどうして不機嫌なのか。長老カーティヤーヤニープトラ等によって編纂されたと伝聞されるが故に、所依たるものとしては説かれていないので、経を所依とすべきであると説かれ、ア

ビダルマを所依とすべきであるとは〔説かれていない〕からである。また、異なった部派間で、アビダルマの教義が分かれ、道理に矛盾するからである。アビダルマに説かれる不相応〔行法〕と過去・未来〔の法〕と阿羅漢の退失等は道理に耐えるものではない。道理に矛盾するような仏語はないからである。

しかし大徳衆賢は言う。〔アビダルマは〕仏によって認められているから仏説である。『集異門〔足論〕』等のように、と。〔けれども〕仏によって認められているということこそここで吟味すべきである。雑染と清浄との因果を遍知することに随順するから仏によって認められているものであるという、そのことがもし先と同様なら、『集異門〔経〕』等の経を捨て去ってしまうという過ちを犯すことにならない。仏によって認められているからであり、別解脱律儀は所依たるものとして説かれているからであり、残りはその広説だからである。〔四依中にアビダルマを〕所依とすべきでないとはっきりと説かれていないということ根拠として〔仏説か否かを〕限定できない。もしアビダルマも経の広説だから所依とすべきであるというなら、仏説でないから、経の広説としては認められず、あるいは諸仏によって認められていないから所依たるものではない。かの智蘊の聚りがアビダルマであることを証明しようとしても、智を所依〔とせよという世尊の〕語によって、それ（アビダルマ）が所依であるとは理解されない。

また、「〔四依中にはただ〕経に関して〔のみ、了義が〕所依であることの限定がなされているのだから〔、四依中にアビダルマを所依とすべきでないとはっきりと説かれていないということ根拠として仏説か否かを限定できない〕」と言うが、そのことによって〔われわれの〕論証における過失を何も語ったことにはならない。限定がなされていないということが、もし〔アビダルマは〕限定がなされていない訳ではないということであれば、そこ（四依中）に〔アビダルマが〕所依たるべきものとして説かれていないことが〔仏説でないことの〕根拠である。それは〔アビダルマが〕所依たり得ないことを物語るものである。未了義経は、言葉通りの意味によっては量（pramāṇa）とならないものである。その〔言葉通りの〕意味を持たないのだから、密意を有するものとして〔量となることは〕ない。ゆえにそれ（未了義経）は取るに足らないたわごとである。

また、「アビダルマは経の特殊なものであるから、応頌等と同様、所依である」と言ったが、それも正しくない。『発智〔論〕』等は経の特殊なものではないか

らである。なぜなら逝去された師の所説において聖者カーティヤーヤニープトラ等によって編集されたからである。また世尊によって〔次のように〕説かれている。「比丘たちよ、どのようであれば比丘は法を知る者であるか。ここで比丘が法を知るとは、すなわち修多羅（經）・祇夜（応頌）・記別・伽陀・優陀那・尼陀那・阿婆陀那・如是語・本生・方広・未曾有・優婆提舍を〔を知ることである〕」と。この十二部教中には『発智〔論〕』等のアビダルマは所収のものとされていない。当時『発智〔論〕』は存在しなかったからである。「しかし世尊によって、ウダーナ（優陀那）と同様、散説されたと言われているではないか」〔と云えば〕、そう言われてはいるが、しかしそのように経量部は認めない。またウダーナは経等の中に散説されているのが優婆提舍に認められるが、しかしアビダルマに関してはそうではないから共通性はない。

また、「経を所依とすべし」というその場合の「所依」の語は量を意味しない。それではどうか。「汝は曾て私に思いを寄せてきたのでブドガラを所依としていたのである。しかし今は経を忘失しないことに専念しなくてはならない」というこれがその意味である、と〔毘婆沙師は〕言った。〔しかし〕そういうこともなら〔われわれの〕證因の過失を述べるものではない。それではどうか。〔毘婆沙師の〕その議論は「これは證因の効力をまさしく有するものである」として〔われわれの證因を〕打ち破るものではない。そしてもしアビダルマが仏によって説かれたものであるならば、なぜ世尊はアーナンダにアビダルマを忘失しないよう専念すべきことを命じなかったのか。また、「ここ（『大般涅槃經』）において経という語で語られているものは如来の語のすべて〔を指すの〕である」と言うが、それも〔われわれの證因を〕打ち破るものではない。アビダルマは如来の語ではないから、それはそこには含まれていない。また、「経というものはまさしくアビダルマが説かれているのである。なぜならそれ（アビダルマ）が経の究極である。それによって了義〔経〕か未了義経かが判定されるからである」と〔毘婆沙師は〕言うが、それも〔そうではない。そうとは〕認められないからである。それゆえ〔毘婆沙師の〕證因はその目的を遂げるものではない。

もし、「そ〔の アビダルマ〕の教義が相互に異なる」という〔われわれの提示した〕その證因が絶対的でないことを顯示するために、「諸経も異なる部派の間では相互に異なることが見られる。そして経が相互に異なるからこそ、そ〔の

アビダルマ]の教義が相互に異なるのだ」と言うなら、その点に関しては、異なる部派の間においては相互に矛盾する語と意味とが語られるから、アビダルマにおける教義の別が言われるのであり、経典が相互に異なるからではない。ゆえにこ〔のアビダルマの教義が相互に異なる〕ということに経〔が相互に異なるからということを理由に持ち出すこと〕は当てはまらない。経においては意味に矛盾はない。了義経に矛盾がないことによって未了義経の意味が了解されるからである。それゆえにこそ経に意味の矛盾がないことを示すために、世尊は了義経が所依であり、未了義〔経〕は〔そうでは〕ないと説かれたのである。異なる部派の間において過剰や欠損のある経が誦せられる。〔だからといって〕そこに相互に矛盾した意味があるわけではない。それゆえアビダルマの教義が相互に異なるのは経が相互に異なるからではない。

「七有がある」という経が誦せられ、それら（七有）によってアビダルマでは中有があると立てられる」と〔毘婆沙師は〕言うが、それによってアビダルマの仏語でないことが説かれたことになる。また、もしアビダルマが了義であれば、異なった部派の間でそれぞれ別々に語と意味とが立てられることが不合理である。たとえ部派ごとに了義〔のアビダルマの存在すること〕が認められるとしても、諸仏世尊の間には相互に矛盾する語はあり得ないから、それは正しくない。もし〔アビダルマが〕未了義であるとすれば、そうである場合には〔アビダルマが〕所依とならないという過失に陥ることになる。

「歳老いて出家して三蔵〔を受持する者〕は得難い」と如来に説かれているからアビダルマは仏語である」とある者たちは〔言う〕。「それは雑蔵等を意図する語である」〔と毘婆沙師は言うが、そうでは〕ない。「〔雑蔵は〕経だから〔その如来の語は論蔵の存在を証するもの〕である」ともしいうならば、それはそうではない。それ（雑蔵）は経とは認められないから〔経・律・雑の三蔵として如来に説かれたから〕である。あるいは経の特殊なものだから〔経蔵とは別に雑蔵として説かれたの〕である。

汝の考えに従って〔雑蔵は〕アビダルマと同様のものであり、アビダルマは経の特殊なものでない」ともし〔するならば〕、それ（雑蔵）は十二部教に含まれないから、仏語でないという過失に陥る。もし〔雑蔵は〕経という語で呼ばれていないから経でないとするなら、応頌等〔も経という語で呼ばれていないから〕経でないという過ちに陥ることになり、そうなれば三蔵に含まれないか



ら〔応頌等が〕仏語でないことになる。

また「経・律・摩怛理迦を受持すると説かれた」と言うが、〔アビダルマを受持するとは〕どこにも説かれていない。「摩怛理迦を受持する」と説かれたというが、摩怛理迦がアビダルマであるとどこに説かれているのか。〔この問いに対して毘婆沙師は〕「意味的に説かれている。なぜなら尊者大迦葉によって〔次のように〕説かれているからである。“摩怛理迦、摩怛理迦というが、摩怛理迦とは何が語られているのか。四念住、乃至、八支聖道、四正行、四法句、四無礙解、空空・無願無願・無相無相〔の三三昧〕、諸現觀辺、諸世俗智、雜修靜慮、無諍、願智、辺際〔靜慮〕、止、觀、集異門、法蘊、施設というこれが摩怛理迦と言われる。”しかしこれらの法は雜〔藏〕中に完全には認められない。それゆえ雜〔藏〕が第三の藏であるとそう言うのは正しくない」と言う。その場合、経・律とか摩怛理迦というのは書物が意図されているのであり、〔所説の〕意味が〔意図されているの〕ではない。それゆえ「四念住」云々というのは書物を指示するものであり、それは〔所説の〕意味を指示するものではない。もし「それら（四念住等）の経は雜〔藏〕においてと同様アビダルマにおいても散逸しているのである。経という語によってそれ（アビダルマ）のことを言ったのである」というなら、そうであれば「集異門」まで説かれるはずはない。〔「集異門」は経・律の〕まさしく経という語に包摂されるからである。また、もしこの場合に摩怛理迦という語によってアビダルマが意図されているのであれば、なぜアビダルマを受持する者こそ説かれなかったのか。あるいは「集異門」等と同じように『発智〔論〕』等もどうして直接説かれていないのか。「集異門」がアビダルマではないことによって、摩怛理迦がアビダルマではないことが確認されるのである。以上のほんの一例によって残りの否定すべきものは理解できるので傍論を終了することとする。

（本稿は平成19年度から平成22年度まで科学研究補助金を支給されて行われる「ポタラ宮所蔵スティラマティの俱舍論注釈書『真実義』の新出梵文写本研究」に対する研究報告の一部である。）

## 注記

下線は俱舍論本文であることを指示する。当該の俱舍論本文の和訳に関しては、櫻部建『俱舍論の研究』（法蔵館、1969）を参考にした。

- 1 『正理』巻一、三二九頁下六一九。此論所依阿毘達磨、何因故説、誰復先説。雖不應問説對法人。佛教依法、不依人故、而欲必以人爲量者、此及前問今當總答。
- 2 [ ] 内はサンスクリットには欠けている。チベット訳により補う。
- 3 *AKVy* (11, 26-29) は、アビダルマ諸論書の著者について、発智論をカーティヤーニーブトラに、品類論をヴァスミトラ、識身論をデーヴァシャルマン、法蘊論をシャーリブトラ、施設論をマーウドガルヤーヤナ、界身論をプールナ、集異門論をマハーカウシュティラに帰する經量部の説を世親の説として示している。